

# 香 峰

KATSURAGI

—泉州山岳会—

目 次

2002.12 ~ 2003.2

<M チーム>

冬山合宿・鹿島槍ヶ岳	木下春雄	2
・リーダー所感	坪佐圭子	3
アイスクライミング、八ヶ岳にて	北山峰生	4
八ヶ岳・赤岳西壁・主稜	名越真理子	6
・文三郎尾根から赤岳	牧野直史	6
・硫黄岳	坂口温己	7
氷を求めて金剛山	北山峰生	8
月夜のピバーク：荒川3ルンゼ	北山峰生	9
谷川岳は近く、そして遠かった	北山峰生	12
湖北・横山岳	松本明恵	14
台高・明神平から雲ヶ瀬山の縦走	村田和隆	15
播但・段ヶ峰	杉山 僚	16
奥美濃・小津権現山	大崎義治	17

<B チーム>

冬山合宿・常念岳	石井浩二	18
	角田 浩	19
・リーダー所感	榎田誠寛	20
納山祭報告		21
総会報告		22
山行記録		25
編集後記		26

第330号  
2003

2002年12月30日(夜)～2003年1月2日

CL 坪佐圭子 SL 北山峰生 名越真理子 木下春雄 大崎義治 島太一 上田健二

12月31日(晴れ)

タクシーで大町アルペンライン車止めゲートに到着。身支度を整えて6時35分出発。車道は除雪をしてあったが、薄っすら雪が積もっていた。歩き出していきなり体のバランスを崩す。雪の下は道一面ガチガチに凍ったアイスバーン状態だった。滑りやすい所を避けて延々車道を歩く。8時05分柏原新道登山口に到着。トレースはしっかり付いているが、いきなり急な登りの連続、北山さんにどんどん離されていく。トレーニング不足をシミジミ反省する。途中、2つのパーティーが下山していった。夏道から南尾根の冬道を登る。13時15分、森林限界付近にB.C.を設営した。

1月1日(快晴)

4時50分B.C.出発。満天の星空、無風、雲海、最高の天気で私達を迎えてくれた。東の空がだんだん明るくなってきた。左後方には種池山荘の灯りが見えている。南尾根は大雪原なので念のため標布を立てて登る。爺ヶ岳南峰に到着。稜線上は強い風と聞いていたので覚悟していたが、全く風が吹いていないので拍子抜け。西の方角には、

夏山合宿で登った剣岳がよく見える。源次郎尾根、八ツ峰、チンネ、出発も帰りもヘッドライトを照らし、毎日ヘトヘトになって帰って来たことを懐かしく思う。爺ヶ岳中峰をトラバースしていると、鹿島槍ヶ岳に朝日が当たり、頂上からだんだんと、山肌の色が白色から薄赤色にかわっていく。2003年の初日の出に全員から歓声があがる。布引山に近づくにつれて西風が次第に強くなって来た。稜線は雪が飛ばされてほとんど積もっていない。顔に風が当たって痛い。ヤッケのフードで顔を覆って進んでいく。鹿島槍ヶ岳南峰に到着。いつの間にか風は収まっていた。記念写真を撮ったり、360度のすばらしい景色を満喫したりしていると目の前がきらきら光る。ダイヤモンドダストだ。実に美しい。

冷池山荘まで引き返すと、小屋の周辺では数パーティーがテントを張っていた。爺ヶ岳まで



うんざりするような長い登りが続くのが見える。登り坂に入るとパタパタで足がだるく、フラフラする。爺ヶ岳北峰のトラバースでは、足を滑らせると谷底まで滑落してしまいそうだ。斜面では、一歩一歩慎重に足を運ぶ。爺ヶ岳の頂上に近づくほど風が強くなった。全員が到着するまで、頂上でツエルトを被って小休止をとる。

1月2日(雪)

4時起床。昨日とは違って風が強くて雪が降り続けている。テントを撤収しているとヘッドライトの灯りが消えた。昨日電池を代えたばかりなのにつかない。ほかにもライトがつかなくなった人が数人いた。(寒さと雪のせいだったのか?) 坪佐さんから明るくなるまで待機の指示が出る。ザックが見る見るうちに真っ白くなり、息でまつ毛が凍る。手や足をパタパタ

### <リーダー所感、CL 坪佐圭子>

今回の冬山合宿を計画するにあたりいろいろ候補が挙げられたが、私がCLを引き受ける条件として鹿島槍ヶ岳を選ばせてもらった。この鹿島槍ヶ岳は9年前にはリーダーに率いられて登ってはいるものの、2年前にはCLで計画したが、悪天候と日数の条件で敗退していたので、リベンジという意味でも感慨深い山である。

メンバー的にもほとんどがBチームで指導してきた者ばかりだったので、後立山の山域の合宿に参加して本物の冬山の稜線行動の厳しさを経験することの意義を伝えたいということもあった。

合宿計画は、その時私が考えるには、順調に進みトレーニングについても完璧とはいえないがそれなりに隊全体、満足いく仕上がりであったように思えた。そんな中、最終的に不参加者が相次いで出てしまい、人数が減ったことは残念である。私なりにトレーニング計画の内容や精神的なサポートが足りなかった事など反省点でもあり、今でも悔いの残る点である。

現場ではいわゆる理想的な冬山合宿で終わっ

させながら寒さをしのぐ。6時40分下山開始。昨晚から降つづいている雪が、一昨日登ってきた踏み跡を完全に消していた。どこを降りれば良いか判らない。標布を発見、標布に導かれ柏原新道登山口を目指す。今日が、入山かアタックの日だったらどのような合宿になっていたろうか? 全員が鹿島槍ヶ岳のピークを踏むことができ、無事下山できて楽しい合宿でした。

<行動記録>

12/31 車止めゲート 6:35 ~ 柏原新道登山口 8:05  
~ J.P.13:00 ~ 2400m付近 B.C.13:15  
1/1 B.C.4:50 ~ 爺ヶ岳南峰 6:15 ~ 冷池山荘  
8:00 ~ 鹿島槍ヶ岳南峰 10:15 ~ 冷池山荘  
11:40 ~ 爺ヶ岳南峰 13:35 ~ B.C.14:35  
1/2 B.C.6:40 ~ 柏原新道登山口 9:10 ~ 車止め  
ゲート 10:20

た。初日は重い荷を担ぎ上げ、快適なテント場、ご馳走三昧の食事、快晴のアタック、360度の大パノラマ、ルートの心配もなく強風にさらされることもなく、凍傷の心配もほとんどない。リーダーにとっては楽勝であった。あらゆる心配事から解放され拍子抜けだった。しかし違う心配事が浮かんでくる。隊のみんなは冬山を甘く見ないか、稜線の厳しさを甘く見ないかなどなどである。最終の下山日ははるうじて天候が荒れ模様となり、少しは厳しさを体験できたと思いながらの下山であった。

合宿を終えて思い返すと、隊全体はうまくまとまり、SLの北山君を初め、中堅が育ってきており精力的に活躍してくれた。好天に恵まれた上、メンバーの足並みもそろっており指揮も高まりスムーズに行動できたことが大変嬉しく、Bチームのリーダーを経験した者にとっては何よりのご褒美である。

今後も、今回の経験を生かし、また参加できなかった者もそれぞれの目標を見だし、一つ一つステップアップして行って欲しい。

## <Mチーム> アイスクライミング、ハヶ岳にて

北山峰生

2003年1月11日(夜)~1月13日

L北山峰生 名越真理子

アイスクライミングといえば、今まではせいぜいトップロープにぶらさがって、ピッケルを振り回していた程度。今回は待ちに待った初本チャンだ。しかも2人そろってハヶ岳は初見参。出発前から胸が高鳴っていた。

1月12日(曇りのち晴れ)

**三叉峰ルンゼ~石尊稜** うすら明かりのなか林道を登り出す。赤岳鉱泉までどれくらいか、まったく想像もつかない。いろいろな記録を読む限りでは2~3時間?なるべく早くつきたいものだ。コテコテに踏みかためられたトレースを黙々とたどると、突如雑然たるテント村が出現した。さっそくツェルト設営。

天気は上々、だけど稜線は雲に隠れてよくみえない。時折サッと晴れて、横岳西面が見渡せる。一見してそれとわかる大同心、その隣の滝は大同心大滝か。今日のルートは.....、細かい尾根とルンゼが入り組んで、よくわからん。とりあえず行ってみよう!

中山乗越へむかう一般道からそれて、トレースを頼りに沢を詰める。左から出合う沢を数えて、1本目、2本目。目の前の尾根にたくさんの人が数珠繋ぎに取り付いているのを見て、これが石尊稜に違いないと確信。ひとつ手前の顕著なルンゼにはいる。数mも行くとトレースがなくなり、あとはひたすらラッセルだらけ。やっぱり氷瀑はそうとう埋もれているらしい。

たぶん滝(1段目)の落ち口にあたるであろう、露岩の基部で登攀準備。自慢のギアで身を固め、あるいは借り物のバイル・スクリュウハーケンを装着し、いざ登攀開始。取付はシュンドみたいに口の開いたすきまがあって、細い

スノーブリッジをこわしながらはい上がる。期待していた氷は、落ち口で2mほど顔をのぞかせているだけ。だけど、一応スクリュウをねじ込んだり、ピッケルをあちこち振り回したり、いろいろと工夫してみる。なんせ、ひとつひとつの道具のセットの仕方や使い方は、試してみないとわからないのだから。

雪のつまったルンゼをどどんラッセルし、スタンディングアックスで確保体制。2ピッチ目は名越さんがそのまま行って、2段目の滝にトライ。やっぱり落ち口で3mばかりの氷が出ていたのだが、短いものの少しハングして手強いらしい。ここは選手交代、確保してくれるすぐ横を、氷を蹴散らしながら登っていく。ハングで両足ともすっぽ抜けて、両手のアックスにぶらさがった時はさすがに冷や汗ものでした。

2段目に再トライの名越さんは、何度かテンションをかけた末、これをクリア。それにしても、雪練以外にスタンディングアックスで墜落を受け止めるのは初めてだ。突き刺しただけのピッケルは油断するとすぐに傾くが、踏みつけたり手で押さえていると、意外と丈夫な支点となることもわかった。また、スクリュウでアンカーをつくってみたり、スウィングの角度を工夫してみたり、いろいろ練習しながらのんびり進む。当然時間はかかるが、晴れ渡った青空の下ではまったく気にならず。

3ピッチ目は、またしてもラッセルの後、3段目の滝が現れる。2mほどのちいさな氷だ。ここはもはや要領をつかんだ名越さんが突破していく。だが、ちょうどその時一陣の風が舞い、

チリ雪崩が通過して瞬く間に雪だるまと化する。「イヤー、冷たい！」と叫ぶ後ろ姿を見て、僕はひそかにヤッケのフードをかぶってしまいました。

ここから数ピッチ、ラッセルで進んでは氷化した雪面に両手のアックスを突き刺す。アックスを持ち替えたり、メインにつないだシュリングを処理したりする動作が、じつにうっとおしい。やっぱりこういうことは、通り一遍の講習会では身に付かないものだ実感。

もはや上部には雪のつまったルンゼが稜線までのびている。適当なところで石尊稜に上がるのがよさそうだ。20mほどの雪壁状をこなし、夕暮れの雪稜に飛び出す。諏訪湖のかなた、中央アルプス(?)に日が傾き、しばし見上げる雪稜がオレンジに輝く。今日1日分の行動食を一気にほおぼる2人であった。

だが、心なごむ一時はすぐに終わり、ほどなくして夕闇がやってくる。わかりきったことではあったが.....。

雪稜をコンテでしばし進むと、もろそうな岩稜が露出している。ヘッドランプを灯し、「ここからまともに岩登りやけど、いける？」パートナーへ、自分へ、どちらへともつかない確認の言葉を口にする。このあとはスタカット2ピッチ、さらにコンテで100mほど登ると石尊峰に至る。暗いので時間はかかったが、月明かりに照らされて、安心して登ることができた。それにしても2人の集中力は最後までとぎれることがなく、トレーニングの成果が出ているようで嬉しかった。

このあとは、稜線をたどって地蔵尾根下降。赤岳鉱泉のテント場はすでに就寝の時間を迎えており、そこへ割って入る疲労困憊の2人。本来13時間も歩き回る予定ではなかったのですが、名越さん、毎度毎度ごくろうさま。

1月13日(快晴)

**硫黄岳** せっかくハヶ岳にきたのだから、硫

黄岳～赤岳への稜線を縦走しておきたい。半日で戻る予定で出発。

長い長い樹林帯の登り。地図を見ると気が遠くなりそうなくらい、体が重かった。それでも1時間ちょっとで稜線に出ると、横岳の西面が一望の下に見渡せる。大同心に小同心。赤岳の主稜はどれかよくわからんが、阿弥陀北稜、それに北西稜。

硫黄岳を越え、強風のなか小屋をめざして降りていく。逆風になってつらいなあ、なんて余裕はしだいに薄れ、体が吹っ飛ばされそうなほどの強風に息もたえだえ。コルのあたりは特に強く、耐風姿勢もままならず。

今日は昼までには赤岳鉱泉に戻りたいところだ。本来この縦走の目的であった概念の把握も十分に達成できた。このままつっこむ意味もあまりないな、と考えて引き返すこととした。ちょっとだけ未練もあったのだが.....。

硫黄岳まで登り返すと、さほど強風というほどでもない。コルの部分だけ特別に強かったんやろか。とりあえず来週また出直そう。

もとの樹林帯をぐんぐん下り、赤岳鉱泉まで来ると安心してテルモスのコーヒーを飲み干してしまう。今日はやたらにのどが渴いてたまらない。冬山で、0.5リットルのテルモスを空にするのは初めてだ。それだけ、昨日の疲労が残っていたのだろう。

最後に若干行程を割愛したが、今山行の目的はすべて達したし、満足のいく練習もこなし、2日間とは思えない充実した山行であった。

<行動記録>

1/12 美濃戸口 6:50～赤岳鉱泉 9:20-10:30～三叉峰ルンゼ取付 11:45～石尊稜上部 16:30-17:00～石尊峰 18:30～赤岳鉱泉 20:00

1/13 赤岳鉱泉 6:20～赤岩の頭 7:30～撤退決定 8:20～赤岳鉱泉 9:35-10:25～美濃戸口 12:00

2003年1月17日(夜)~19日

北山峰生 名越真理子 牧野直史 坂口温己

1月18日(小雪)

**赤岳西壁・主稜** 先週に引き続き八ヶ岳での登はんである。先週の三叉峰ルンゼは初めての冬の登はんということもあり、必死でなんとか登ったという感じだったが今回はどうだろうか？まだ薄暗い中、美濃戸口を出発する。天気はあまりよくなさそう。案の定、行者小屋に着くころにはちらほら雪が降り出してきた。小屋からは目の前に赤岳が見えるがどこが主稜かよくわからない。文三郎尾根に入りしばらく行くと2人組が取り付いているのが見えた。もう少し登ったところよりトラバース気味の道がついているのがはっきり見える。取り付きがわかるか心配だったがこれで一安心である。

分岐のところでそのまま文三郎尾根を行く牧野君、坂口さんと別れ、登はん準備をして取り付きに向かう。ふと見ると2人組の他に単独行の人有り。わしわしとあつという間に登って消えていった。1人？確保無し？そんなに難しくないのか？いろいろ考えながら、1P目、トップを登る北山さんの確保の準備をする。チムニー状で上部にチョックストーン。いきなり嫌な感じ。トップでなくてよかった。セカンドの私は両壁に足を突っ張らせながら勢いで乗り越した。2P目、小フェースからリッジ。下から見ると足の置き場が一杯あるように見えるのに登ると不思議と見えなくなる。フェースを登るのに少し手間どってしまった。まだまだトレーニングが必要だと痛感する。埋まってるのかアンカーもなく岩でとるがあまり当てにならない感じ(とりかたがまずいんだろうなー)。3P目、雪稜。

4P目、このルートのコア部。凹角状の岩壁下で二人組パーティーに追いつく。なかなかザイルが動かず、難儀している様子。風が冷たくほとんどん体が固まって、待ち時間がとても長く感じる。やっと順番となり北山さんトップで登り始める。難なく解除のコールがかかる。前の人のあの戸感っていたのはなんだったのか？それほど難しさも感じず楽しく登った。1P目の方が怖かった……。後は雪稜の登り。最上部で文三郎尾根と合流し山頂へと抜けた。

頂上ではすでに牧野君、坂口さんがツェルトを張って待っていた。ガスがかかっており展望台からの眺望はさっぱりで、目の前にあるはずの阿弥陀岳さえも見えずがっかり。明日の天候もあまりよくなさそうということで、予定では稜線上にBVし硫黄岳へ縦走という予定だったが赤岳鉱泉まで降りることになった。地蔵尾根よりの下りはホワイトアウト気味で、途中みちを少し外すと言うロスもあり赤岳鉱泉に着くころには真っ暗になっていた(先週の20時着よりましか……)。お疲れ様でした。

(名越記)

**文三郎尾根から赤岳** 八ヶ岳は、冬山としては、私が最も興味を持っていた山で楽しみにしていました。しかし、とんでもなく寒いということを知っていたので、かなり心配もしていました。美濃戸口に着くとそれほどでもなく、寒さはこんなものかと思ったが、この日が例外的に気温が高かったのかもしれない。

美濃戸口から行者小屋まではどうにも眠たくて、最悪の居眠り歩行になった。しかし、行者小屋に着くと、ガスの中から横岳西壁の大同

心とその周辺が姿を現し、興奮してすっかり眠気が飛んでしまった。横岳西壁には、面白い冬期登攀のルートがたくさんあるので、今後挑戦していければいいなと思っている。

行者小屋から赤岳山頂までは高度差 600mほどで、こぢんまりとした印象であった。文三郎尾根の途中で、赤岳主稜を登る北山さんや名越さんと別れ、私と坂口さんはそのまま文三郎尾根を登って山頂を目指した。登るにつれて傾斜がきつくなり、面白くなってきた。稜線に出ると急に風がきつくなったが、恐れていたほどではなかった。鎖づたいに登り続けたが、山頂へのルートを見落とし、少し行き過ぎてしまった。ふと気が付くと、後方に山頂小屋らしき建物が見えていて引き返すことになった。そういえば、尾根の陰から突然人が現れて下山していったので、そこが山頂だったんだなと思った。少し戻ると、岩に赤ペンキで矢印が書かれてあった。「山と渓谷」で問題にされていたが、このペイントをしたのも、北鎌尾根と北岳バットレスと同じ人物なのだろうか。なんとか無事に山頂にたどりつき、登攀が終了した。

山頂は雲が多く残念だったが、南西方向の展望が少しの間開けていた。私は昨年も今年も冬山合宿に参加できず、今回が 3000m級の冬山初登頂となった。

八ヶ岳へは、今後も、何度も足を運びたいが、今回は初めてということで、地理的な概念をできるだけ頭に入れて帰ろうと思った。

(牧野記)

1月19日(晴れ)

**硫黄岳** 1月18日に南八ヶ岳の赤岳に登り、赤岳鉱泉で泊まりました。すごく立派な山小屋とトイレ、それに水汲み場もある良い所です。ツェルトを使うのは初めてで不安でしたが、実際には二人で過ごすには十分な広さと空間があり、底から直に伝わる雪の冷たさを除けば、かなり快適に過ごせます。ただ、組み立てるのが難しく練習が要りそうです。その夜の冷え込

みは厳しく、ポリタンの蓋が凍って開かず、中の水も凍っていて驚きました。何もかもカチコチで耐え難い寒さの中、名越さんにももらった温かい日本酒が目に、身体に染み渡っていきました。明日は硫黄岳に登ります。

翌 19 日、晴れ、アイゼンを付けアタック装備で出発。小屋の真正面から出ている道を行き、何回か橋を渡り硫黄岳への登山道を進む。夜が白々と明けてゆく、最もさわやかで気持ちの良い一時、ヘッドランプの明かりから太陽の光に変わる瞬間、その一瞬一瞬に心が満たされる。樹林帯をくねくね曲がりながら登って行く、道はしっかり踏み固められていて歩きやすいはずだった。それでも私は一人つまずいたり、引っかけたり、まだまだ課題が多い。一時間くらい歩き続けると、木々の間から山々の美しい景色がちらっと見え心が潤う。さらに足を進めると、急に木々が無くなり、赤岩の頭という稜線に出た。赤岩の頭は見晴らしがとても良く、休憩をとり四方の山々を見て楽しんだ。硫黄岳の頂上はすぐそこに、その向こうに横岳や赤岳といった南八ヶ岳の山々が見え、遥か遠方には白馬岳や立山、槍ヶ岳、御嶽山まで望めたそうです。あと少しの登りと岩場を頑張ると頂上に着いた。

頂上は小石が敷き詰められた平らな土地で雪はなく、飛ばされるほどではないけど強い風が吹いていた。名越さんと牧野さんがケルンの裏で風をしのぎながら、遅れて到着した私を待っていてくれました。横岳や赤岳が美しく、実際より近く見えてそうな気がした。長居はせず、一気に赤岳鉱泉まで下った。途中硫黄岳へ登るたくさんの人達とすれ違い、日中にはぎやかだろうと思った。赤岳鉱泉に着くと、すぐにツェルトをしまい荷造りをして、あとは美濃戸口の駐車場まで歩くのみ。長い林道をひたすら行く途中、名越さんが何か言ってると思ったその時、私たちの目の前に一匹のカモシカが現れ驚いた。全身はふさふさの焦げ茶色の毛だけど、首だけ真っ白の毛が生えていて、正面から見ると真っ

白のあごひげを蓄えたおじいさんの顔みたいだった。カモシカは逃げずに私たちを見ていた、でも私たちが進むと軽やかな足取りで木々の間に移動してまた私たちの方を見ていた。あんなに存在感のある野生の動物を見られたのはうれしかったが、大きかったしちょっと怖かった。その後、出発から2時間で美濃戸口に無事到着した。

今回の山行は皆に迷惑をかけましたが、迫力があり見ごたえのある山に行くことができて本

当にうれしく思っています。もっとたくさん歩いて体力をつけて、まだ見ぬたくさんの素晴らしい山に行けるように頑張りたいです。

(坂口記)

#### <行動記録>

1/18 美濃戸口 6:30～行者小屋 10:10～赤岳山頂 15:00～赤岳鉱泉 18:00

1/19 赤岳鉱泉 5:40～硫黄岳 7:30～赤岳鉱泉 8:50～美濃戸口 11:00

## 氷を求めて金剛山

北山峰生

冬山合宿があまりにもあっさり終わったので、帰りの車中、残りの休みはどうしよう、などと考えていました。どっか、山でも行こっかなー、と。

翌日は正月の好天が一転して、強い冬型に覆われました。奈良ではこの冬最初のまとまった雪です。これはチャンス、どっかに氷は張ってないか？しかも手頃にぶらっと行けるところで。

そんなわけで1月5日、金剛山のツツジ尾谷へ行きました。ツツジ尾谷は千早の正面登山道のすぐ北隣にあって、沢を詰めて直接頂上に抜けるという楽しいルートです。朝早くから列をなして登る元気な中高年パワーに混じって、Wアックスとヘルメットをぶら下げた怪しげな男が一人……。

林道を離れるとすぐ、F1「腰折ノ滝」が現れます。実はこの沢ではもっとも立派な滝なのですが、さすがにここはまだ凍ってません。踏み跡というより登山道にちかい巻道をさっさと登って、次の滝を目指します。が、氷が

張ってると傾斜が緩すぎて話にならず、傾斜があるのはただの滝。

F4くらいで、やっとまともに登れそうな氷にであいました。といっても、グズグズに緩んだ腐れ氷ですが。まあ、せっかく来たのだから、と一応トップロープをたらし取り付けてみました。高さ10m程度、ロープをセットして懸垂で降りていると、横行くおじさんの好奇心な視線をあびてしまう。

なんべんか登って、降りて、また登って。もともと頼りない氷なのに、何度も登るとほとんど岩登りに近くなってしまふ。振り下ろしたピックが「ガキッ」とか鳴ってかわいそうなので、ほどほどにして終えることとしました。少し寒くなってきたことだし。

もうツメも近く、この先お楽しみはなさそうです。行動食で小腹を満たしたら、あとは一気に頂上を目指すのみ。この行動食は、当然冬合宿の残り物。いつもよりオツマミが多いのは食糧系の趣味だそうです。今晚もやっぱり行動食に手がのびそうです。

## <Mチーム> 月夜のピバーク：荒川3ルンゼ

北山峰生

2003年2月9日(夜)～2月11日

L北山峰生 杉山 僚

多少覚えたコツを忘れないうちに身につけるべく、南アルプスは野呂川水系の支流、荒川3ルンゼへむかった。めざせ氷のマルチピッチ。2月10日(曇りのち晴れ)

**3ルンゼ右のナメ滝** 「コツコツとアスファルトに響く、足音を踏みしめながら……」暗いトンネルにこだまする2人の足音をききながら、僕の頭には長淵剛の「とんぼ」がリフレインしていた。長い林道歩きを経て、野呂川発電所の手前で荒川出合に到着。ここから荒川沿いの林道へ入り、2本目のルンゼが3ルンゼである。ルート解説にあったとおり、灌木の間に氷柱が見える。

登攀具を身につけ、装備一式はデポしてルンゼに入る。ぐさぐさに腐った雪は、まるで5月の北アルプスのようだ。200～300mほどラッセルすると、左岸の支流に発達した、氷瀑の全景が望まれる。今回のターゲットである「右のナメ滝」。下から見ると何となく傾斜が緩く、行けそうに見える。その左手にある「アーリースプリング」は、岩肌へへばりついたような細長い氷の帯だ。傾斜が強く難しそうだが、どこか貧相で、登攀意欲は沸いてこない。これらとは小さな枝尾根を隔てた左手に、「夢のプライダルベル」がある。数十メートルにおよぶ巨大なつららで、あんなものを登る人の気が知れない。

さて取付には適当な支点がなく、少し手前の灌木をアンカーとする。ざっとみたところ、思ったほどブッシュは出ておらず、ロックハーケンを打てそうなところもない。スクリューハーケンを5本しか用意していないことを、今更ながらに後悔した。

1P、ゆるいナメから登攀開始。氷が硬く、ピックがしっかりきまって気持ちいい。取付の位置が悪かったか、切り立った氷のど真ん中で「ザイル一杯」のコールを浴びる。仕方なくスクリューハーケンとピッケル各1本でアンカーをとる。プラブーツの半分くらいが収まる程度のステップを切るが、こんなところでスリップしたら、制動確保もままならない。こういう支点の不安定さが氷の怖さだとつくづく思う。

2P、だんだんバイルの扱いにも慣れてきて、左岸の立木めざして順調に右上。傾斜変換点の手前で、少し短めだがピッチを切る。立木にアンカーをとると心底ほっとする。

3P、出だしから切り立っている。傾斜は70°～80°程度だろうか。腕を大きく振りかぶると背中から落ちそうで、どうしても氷にへばりついてしまう。スナップを最大限きかして、ジリジリとはい上がる。

スクリューハーケンにスナグと、ありったけのギアをつぎ込んでランニングをとる。右手のピッケルを打ち込んでフィフィをかけるが、とてもこんなものに体重を預ける気にはならない。アイゼンを蹴り込んで、小さなステップを切っては支点作り。そんな作業の繰り返しだから、時間がかかってしかたない。

50mザイルをのぼすと5本のハーケンなどアツという間になくなり、しかも立木も見あたらない。多少傾斜がゆるんだ地点で、ダブルアックスでアンカーを取る。立ちやすいところを選んだつもりだが、うっかり足を滑らせてアンカーにぶら下がってしまった。

杉山さんは今日のためにアイス専用アイゼン

を新調した甲斐あったか、好調に登ってくる。時折微妙にテンションがかかることもあったが、

4P、見上げる頭上に大きな氷が垂れ下がっている。これで最終ピッチかな？と気合い一発。だが、勢いよくこれを乗越すと、前方にはさらに見事な青氷。のっぺりとした雪原をつめ、氷の壁の足下でピッチを切る。たった1本、か細くのびる立木でビレイ。根本は生きているものの、雪の重みに耐えかねたのか、パキッと折れ曲がっている。終日天気は穏やかだったが、すでにベタベタに塗れたヤッケでは、寒さが身にしみる。

5P、はじめは左手、雪のついた岩壁にトライ。これはあまりにも気持ち悪すぎるので、いったんビレイ点まで降りて、再度右手の氷に取り付く。1段乗越すと、さらにもう1段。まだあったんか、ハアしんど。

もう夕暮れも近いし、十分満足したし、終了点までトラバースできそうだし……。ということで最後の氷は割愛し、ブッシュ混じりの雪壁を左上する。そこら中にある幹でやたらとランニングをとり、50m一杯のばしてともかく終了とする。二人そろって一息ついた時には、すでに5時になっていた。予想以上の時間のかかりように、少なからずびっくり。暗くならないうちに、解説ではよくわからない下降路を探すことにする

ブライダルベールの上部をトラバースし、右岸の尾根を登りだすと、かすかなトレースを発見。とりあえずこれを追っていくと、上下にわかれてどちらも奥までつづいているようだった。変に下るよりも、「赤ペンキのついた廃道」を見つけるまでは登り続けたほうがマシと考え、上へ

向かう。が、程なくしてトレースは途絶えることとなる。どうやら先行者も迷って引き返したらしい。日没はとおに過ぎて、ヘッドラン行動の真っ最中。下降路探しは明るくなってから仕切り直すのが賢明と判断し、ここでピバークとする。

幸い樹林帯の中だし、風もないのでツェルトはきっちり張れる。月はくっきり輝いて、雨の心配はなさそう。ただ、ガスもアルコールも下にデポしてきたのがつらい。もともと少なめの行動食はまたたく間に食べ尽くし、非常食のみの一晚かと腹をくくる。その矢先、杉山さんのザックから大量の行動食が。なんと朝飯用にパン2個を残しておいても、さらに2個のパンを二人で分けて食べれたのだ。謝謝。



2月11日(曇り)

寒くておちおち寝てもいられないが、暖かいものを飲むと少しはうとうとできる。靴下がグッショリ濡れていて、替えの靴下をデポしてきたことが悔やまれてならなかった。

5時半になるのを待って、出発の準備にとりかかる。それにしても天気落ち着いていると気持ちも落ち着いて、きわめて心強い。

昨日みついていた下向きのトレースを偵察。3ルンゼへ突き出す小さな尾根を下っているらしく、方向的には正しそうだ。昨日登りながら見ていた様子では、末端までなだらかに下っていく感じではなかったの、最後はルンゼの芯に向かって懸垂だろう。ほどなくして、予想通りすっぱり切れ落ちた断崖の上に出る。

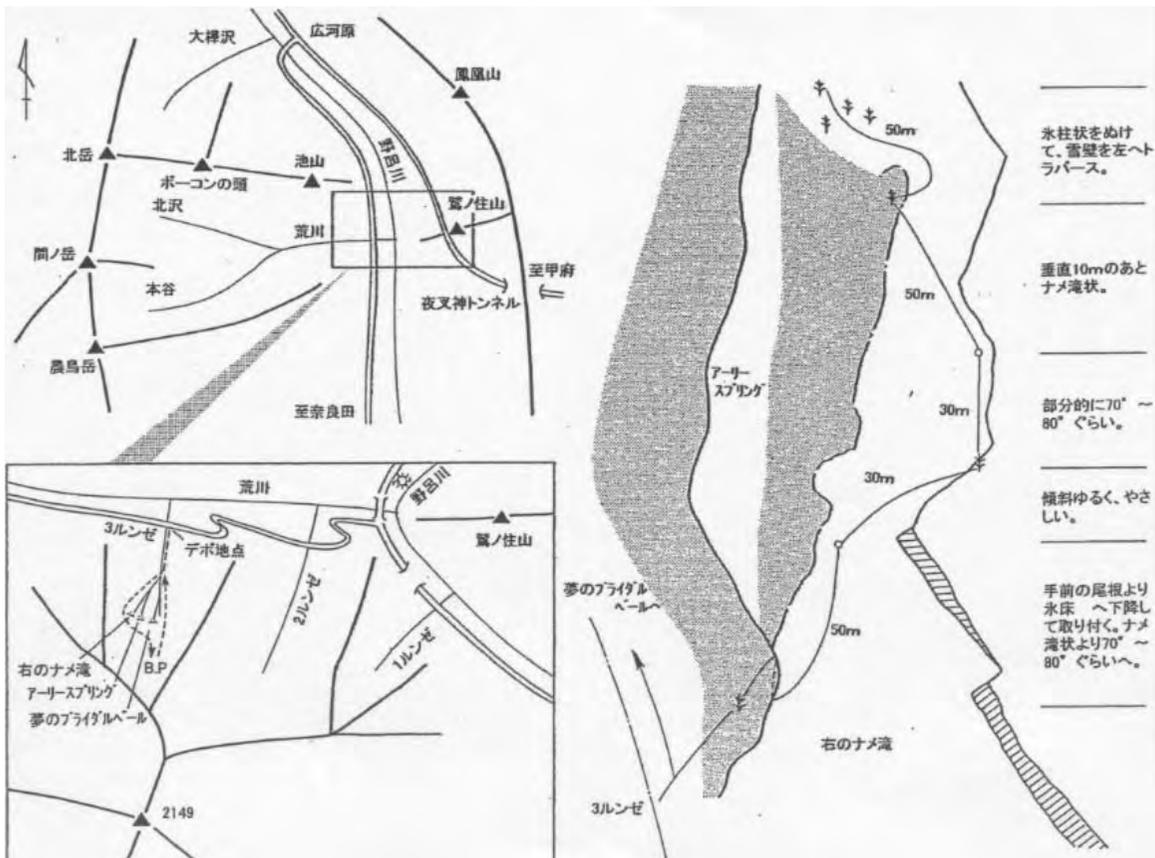
そこはプライダルベール右岸のさらに奥、強烈なオーバーハングに垂れ下がる大きなつらら

のてっぺんだった。ビバークして正解だったと、この時ばかりは実感した。暗闇の中で、こんな空中懸垂をするのはお断りだから。

結局懸垂3回で3ルンゼに到達し、あとは沢芯をラッセルしてひたすら下降。デプリの上を歩くのは気持ち悪いが、ここはしかたない。出合に降りてデポを回収し、置き去りにした行動食を一気にほおばった。ここまできればもう安心、あとは2時間の我慢大会が控えているだけだ。

<行動記録>

- 2/10 奈良田 6:00 ~ 3ルンゼ出合 8:40 - 9:30 ~  
右のナメ滝取付 10:40 ~ 終了点 17:00 ~  
B.P.18:50
- 2/11 B.P.6:10 ~ 3ルンゼ出合 8:25 - 9:00 ~ 奈良田 11:20



2002年12月13日(夜)～12月15日

└北山峰生 有永 寛 坪佐圭子 名越真理子

本来はラッセルトレーニングが目的であった。が、案の定登攀主体の山行に成長し、目的意識をもったトレーニングも重ね、はじめての谷川岳に臨んだのだが……。

12月13日

**離阪** 21時大阪集合。名神では50km規制などあって先が思いやられたが、その後は順調にすすみ、午前4時半、土合の屋内駐車場着。着いたら夜明けとばかり思っていたので、あわてて仮眠場を探したところ、この建物の6階がロープウェイの出発ロビーになっていて、なんとオールナイトで暖房入り！さっそくシュラフに潜り込み、夜明けを待つ。

12月14日(晴れ)

**東尾根** 入山前に見た予想天気図の通り、抜群の晴天。当初副案に挙げていた西黒尾根など見向きもせず、ひたすら一ノ倉をめざす。寒気が強いが、歩き出すとほどなく暖まって気にならない。積雪深は約50cm。トレースに助けられて、一ノ倉沢出合へ到着。トレースがなかったら、ここまで倍以上かかっていただろう。

長い一日になりそうや……。雪煙にけぶる国境稜線は青空に吸い込まれ、はてしなく遠い。出合からは一ノ倉の全貌が仰ぎ見られ、黒々した衝立岩にむかう人影がある。ラッセルしてくれてありがとう。左手には3本の顕著な稜がのびるが、滝沢リッジ、一・二ノ沢中間稜、それに今回の取付となる一ノ沢左稜はいったいどれ？10分ほど一ノ倉沢をつめると左手から一ノ沢が合流、この点はすぐに解決する。ここへ来る間、水流が完全にうまっておらず、プラブーツを水没させてしまったのには少々へこんだ。さて、問題は東尾根へ取りつくルートをどう

するか。計画では雪崩を警戒して、左稜に取り付くことにしていたし、夕べまでは相当な深雪を心配していたのであった。だが、ここへ来てみて、積雪量は確かに多いもの思ったほどの新雪でない。北面であるが故に比較的安定しているとの情報にも納得できる。ただし、本日は出発の時間を遅らせており、すでに8時半をまわっているのが気がかかった。これから日が上がるいっぽうだし、ラッセルにどれだけ時間がかかるかもわからない。計画通り左稜を行こうかと思っただけ、ほんの少し詰めてみて様子を見ることにする。少しだけ、少しだけ……。結局そのまま最後まで一ノ沢を登高することとなった。

「ラッセルは前に足出すんやっ！」壁を崩し、膝を押しつけていると、もたもたするなど言わんばかりの檄が飛ぶ。そうは言っても、重荷に耐えての前屈姿勢では思うように足が出ない。ラッセルはおおむね膝程度、部分的に吹きだまったり、傾斜のきつい部分では腰上まで潜る。湿雪にヤッケを濡らし、重い足をひき上げて一歩、また一歩前進する。はぁ～、長い。途中吹き溜まりの下に弱層が形成されてやらしい部分もあったが、4人の総力で突破、たっぴり3時間半をかけてシンセンのコルへ到着。わかんは、最後のルンゼの出口でトップが使用したのみであった。

せまいコルでアイゼンをつけ、登攀体制を整える。一ノ倉岳のあたりには灰色の雲がわいてきている。このまま天気が崩れることはないやろうか？はるかかなたのスカイラインに三角形のとんがった隆起がある。あれがトマノミミ？あと半日でどこまでいけるのか。「えっ、あんな

に近いんか!？」と坪佐さん。

いよいよ東尾根の登高開始、目の前の雪壁を乗り越す。雪はグズグズ。潜り込んだ足下には岩が露出し、気持ち悪いのでスタカットとする。2ピッチで第2岩峰の基部へ。写真で見たとおり、正面に右上する凹角がある。意気揚々と取り付いてみたものの、出だしのハングが悪い。シュリングに乗ってみたり、アプミをかけてみたり。が、どうしても次の一步が踏み出せない。ならば左のルンゼ状は、と見るものの、うすく被った雪は登る気にならず、そもそも取付までのトラバースがまず不可能。悪戦苦闘していると、坪佐さんから「あんまり無理せんと……。」悔しいけども、有永さんとパトントンタッチ。

だが、その有永さんもやはりハングを越えられない。一同じっと見守るだけ。そしてやはり左手へトラバース、ルンゼ状へ突入する。しかし数歩進んだところで、「雪が締まらへんし、岩が凍ってへんから引っ張ったら抜けてしまう。」とのこと。

シンセンの科尔はすぐ眼下だ。それも当然、たった2ピッチしか登っていないのだから。名越さんがつぶやくように、「2時間かけてここまでか……。」「……。」さすがに返す言葉もない。時間はすでに2時をまわっている。強引に前進しても、まず国境稜線にはたどり着けまい。そもそもザイルにつながっていないと歩けないような雪稜が、この先ずっと続くのであれば、明らかに自分にとって実力を越えている……。そう考えたとき、もはや選択の余地はほかになかった。つまり、これらの岩稜がすっかり雪で埋没し、かつしっかり締まっていないと、この尾根は手におえないのだ。なるほど、さまざまな記録が3月に集中しているのも頷ける。

狭いルンゼで苦戦する有永さんには申し訳ないが、慎重に降りてきてもらう。「悲しいけど、引き返しましょう。」時に2時30分。名越さんと自分にとっては、この冬2回の山行で2度目の敗退。何となく一気に疲れが出てきたが、気

持ちをきりかえ、下山に集中する。自分が気持ち悪くてザイルを出した斜面を、今度は下降するのだ。さすがに有永さんは「俺がラスト行っただ。」と頼もしい言葉。ブッシュや岩角でランニングを取りながら、慎重に下降する。

再びシンセンの科尔に降り立ったころには暮色も濃く、一ノ沢の斜面もすでに締まっていることだろう。念のため4人がザイルにつながったまま、一気に呵成に下りきる。出合からは、衝立岩の基部を下降するパーティーが見える。あれは今朝見かけた後ろ姿だろうか。やっぱり途中で引き返してきたのかなあ。

どっぷり日も暮れて、ヘッドランプをちらつかせて林道を下る。今日の寝床はあの暖房のきいたロビーだ。あわよくばレストランもあいてたりして……。

12月15日(晴れ)

**帰阪** 早朝6時、賑々しいBGMと照明で強制的に起こされ、まずは腹ごしらえ。そしてインフォメーションで温泉チェック。湯桧曽温泉街の「なかや旅館」だと、8時から営業しているとのこと、さっそく出発。実際には7時半に到着、快く入浴させてもらえた。今日は昨日にもましていい天気だ。ドライブだけでは惜しいほどだが、3月に再び相まみえることを決意して、谷川岳をあとにした。

ちなみに往路・復路とも片道8時間の行程であった。はじめての谷川岳はラッセルトレニングと偵察の意味で十分有意義だったし、そして意外にも十分週末の行動範囲であることがわかった。

<行動記録>

11/14 土合 7:00~一ノ倉沢出合 8:30~シンセンの科尔 12:00~第2岩峰 14:30~シンセンの科尔 15:40~一ノ倉沢出合 16:50~土合 18:00

2002年12月14日(夜)~12月15日

L 木下春雄 大崎義治 松本明恵 牧野直史

春ならば様々な花が咲き乱れる「横山岳」、女性ならばいや山好きの私は、一度は登りたいと願いつつチャンスを待つこと.....それは積雪期にやってきた。昨年の積雪量の話聞きラッセル覚悟、わくわくする気持ちを抑えての出発。大阪からわずか2時間半で木之本町杉野に。生活道路は全く雪はないが、集落を抜けると突然バリバリの雪に、チェーン装着で墓谷山分岐へと。

12月22日(晴れ)

取付を間違えないように夜明けを待っての出発。AM 6:45、コエチ谷分岐。ガスで山容は判らぬが立派な道標に迎えられ、古いトレースがついた林道をコエチ谷へと詰める。ワカン装着で夏道に付いた小動物の足跡に導かれながら、まだ雪も深くなく雪質もよく足並みも揃い、順調に高度稼ぎをして鳥越のコルに。AM 8:30、標高 500m。ガスの切れ間に広がる集落と青い空、冬枯れの山肌には静かな空間ができ、我々だけの世界に吸い込まれ、時々樹木に積もった雪が「バサッ、バサー」と落ち驚かされる。ここからは若い牧野さんにトップを願い、高年組は後ろへと付きルンルン~~(私だけかな?) だがいざ自分がトップになると、膝まで潜り始めたワカンに遊ばれ必死にもがき回り、要らぬエネルギーを使い果たし、さほどの高度も稼がぬうちにバトンタッチ。(3人には感謝、感謝!)

AM 10:20、800m峰。真っ青な空に突然、横山岳が目の前にと喜ぶが、実は、横山岳は前のピークの後ろで見えない。(読図ができていないことに反省) 眼下に広がる谷筋に目をやると夏道と思われる滝が見え、雪解けにはもう一度と思うが、いや今はピークを踏むことが先だ。昼

前後にはピークをと決め、しばらくゆるやかな稜線歩きを楽しむ。(この後、330mの登高に予想外の悪戦苦闘) ここで、一番若く元気な牧野さんに頑張って頂きます。

完全に太陽が輝き始め、暖かさと急登続きのラッセルに苦戦しながらも、常々に我々を導いてくれる小動物の足跡を見つめホッと、また黙々とラッセルを始める。樹木に積もった雪が突然頭上に、おまけに足元の湿った重い雪がワカンに付きまとい、もがき回ったあげくの果てがズルズル滑ってなかなか一歩が.....いや登れない。やる気(登る気)はあるのに思い通りに身体が動かぬ悔しさ.....。早めの交代にホッとし気を抜くと、時に踏み外しては雪まみれになり、これが厳しい冬山ではできないヤブ山の楽しさかな?先輩方の教えを思い出し、一步一步頂上へと近づく。PM 12:00、頂上と思いきや、下から眺めた三高尾根展望台だった。あ~残念、でももうすぐだ。だけどここでまた苦戦、至る所で雪の重みで折れた樹木が横たわり、馬乗り、木潜り、踏み抜き、小枝の跳ね返りと、次から次へと行く手を遮る。そう簡単に頂上には行けない。難儀すること30分、ついにやった。PM 12:30、テント場を出発して6時間後だった。

静かな標高 1132mの頂上は、獣たちの足跡が無数に付いた雪原、おまけに 360 度の展望、我々だけの独り占めに大満足! 金剛山と変わらぬ里山といえども、湖北の豪雪地帯の山々に油断は禁物!!

<行動記録>

墓谷山分岐 6:30 ~ 鳥越峠 8:30 ~ 800m峰 10:20 ~ 三高尾根展望台 12:00 ~ 横山岳 12:30 - 13:00 ~ 墓谷山分岐 15:00

## ＜Mチーム＞ 台高・明神平から雲ヶ瀬山の縦走

村田和隆

2003年2月1日～2月2日

└ 村田和隆 長井裕司 上田健二

2月1日（曇り）

朝9時、近鉄大阪線榛原駅に降り立つと、高見山、三峰山への霧氷バスに乗り換える登山客で、すでに構内はごったがえしていた。それらを横目に、私たちは大又へと向う、がらんとした小型の路線バスへ乗り込んだ。車窓からは、刈り取られた稲の跡が残る田んぼの景色がゆったりと流れてゆく。山行は夜を徹しての高速道路での移動が多いが、これが結構山よりも疲れることが多い。たまには電車やバスに乗るのも、旅の実感があっていい。

11時、登山装備に身を固め、笹野神社の横から登り始める。3日ほど前には、大阪の市街地でも久々の積雪があったが、ここでは、プラスチックブーツの底を少し超える程度であった。杉の木立で薄暗い登山道を登り始める。冬の合宿に参加できなかったので、久々のテントを担いでの冬装備で、足取りは少し重い。軽装の単独登山者がぐんぐんと追い抜いて行った。大鏡池の横を通過すると、5人ほどの登山者が休憩しているのに出会う。ここから薊岳へと続く少し痩せた尾根となる。頂上の手前で少し凍った所が現れ、アイゼンを付けた。思ったよりピークは遠く感じられ、15時40分ようやく到着。雪が降り積もり、適度な広さのある見晴らしのいい場所だ。遠くは雲がたれ込め、どんよりとした冬空だが、風はなく、まずまずの天気だ。

予定時間が少しオーバーしており、先を急ぐ。やがて見ごたえのある霧氷群が現れ、疲れをしばし忘れさせてくれた。そして薄暗くなってきたころ、ようやく明神平を見渡せる所まで来た。昔スキー場だったという雪原を霧氷が取り囲み、

夕闇の中にぼんやりと浮かび上がっている。思わず歓声を上げたくなるような別天地だ。少し深くなった雪の斜面を駆け降り、18時ごろ、天理大学山小屋近くの東屋の下に幕営する。他に誰もおらず、相変わらず風もなく、静かな夜であった。

2月2日（曇り）

翌朝、5時50分出発。外はまだまだ暗い。辛うじてあったトレースと地図を確認しながら登る。コンパスが指し示す方向とトレースの方向が違う気がしたが、7時、国見岳へ到着。やはりトレースが正解であった。その後テープや地形を見ながら、歩きやすい尾根道を快適に進む。ただ、所々ルートがわかりにくく、ぼんやり歩いていると道に迷いそうになる。今回はラッセルのトレーニングもするつもりであったが、読図のトレーニングとなってしまった。

最後はこれでもかと言わんばかりに登りが続いたが、11時45分雲ヶ瀬山に到着。高見峠へは13時ごろに着いた。峠の駐車スペースには多くの車が止めてあった。今日も高見山は混雑しているのだろう。こっちの方も空いているいい山なのになあ。高見山の登山道を下山し、13時40分登山口のバス停に到着。風が冷たかったが、人当たりのいいおばあちゃんの売っていた甘酒が、体の芯からほっとさせてくれた。今年は台高、大峰をもっと満喫しようと思う。近場なうえ、静かで、そして何よりまだまだ表情豊かなのがいい。奈良の山々でも相変わらず林道の開発が進んでおり、山は徐々に荒れているが、もうそっとしておいて欲しいなあ。台高には静かなる山が似合う。

2003年1月4日(夜)~1月5日

日帰りで楽しめる山で、雪がたくさんある山はどこだろうか。この時期は、大峰や比良の山には雪がなかなか積もらない。そこで、兵庫県北部の播但国境にある段ヶ峰(ダルガミネ)という山に行くことにした。当日は強い寒波が押し寄せるといふ予報だったので、少し緊張した出発となった。播但連絡道路を生野南で降りると雪が少し積もっている。期待できそうだ。降りてすぐのトンネルを抜けると一面が雪世界(どこかで聞いたことがあるような?)で、ここで車をデポすることにした。

1月5日(晴れのち小雪)

らせん状に登る雪の車道を歩き、少し小径に沿って山の中にはいると、「クマ注意」という標識とともに登山道が現れた。段ヶ峰は1103mの山であるが、1000m前後の達磨ヶ峰、フトウガ峰のピークを連ねる稜線が4kmほど続く。登山口からの登りは足首くらいの雪の量。草木の雪化粧がきれいだ。正月に誰か入山しているのか、トレースが消えたり現れたりしていた。

2時間ほどで達磨ヶ峰に到達し、ここから稜線歩きが始まる。最初は雪をまとった樹林帯の中を歩くことになるが、ところどころ吹きだまりがあって足をとられる。樹林帯がとぎれると風が頬を打って冷たい。早朝は晴れていたが風がとても強く、雲がどんどん流れていく。耳の感覚がなくなってきたので目出帽をかぶった。

冷たい風の中での稜線歩きは低山を歩いているような雰囲気ではなく、フトウガ峰を越えると突然雪の量が増え、ワカンをつけてもひざを越えるラッセルとなった。高原状の広い雪面はシュカブラとなり、低木の枝にはエビのシッポ

ができていて、八ヶ岳にある硫黄岳の広い頂上のような感じ。天候が悪くなったら動けなくなりそうな地形だ。フトウガ峰を過ぎ、段ヶ峰まであと1kmぐらいのところまで正午となった。登り始めてからここまで5時間を要している。段ヶ峰からは千町峠経由で林道を歩き、ラウンドする予定であったが、段ヶ峰に近づくと積雪量が増え、天候も次第に悪くなっている。戻るとすればここで戻らないと時間切れになる。ときおり、強い風の中に小雪が混じってきた。今日は誰にも会っていないが、昨日は千町峠から何人が登っているという情報を聞いていたので、千町峠に明るいうちに降りれば何とかなるだろうと考え、予定どおりピークをねらうことにした。

フトウガ峰を越えるともはやトレースはなくなり、雪原の中をひたすらラッセル。低木の上に積もった雪を何度も踏み抜き、雪の上を這うような感じで段ヶ峰にたどりついた。後を振り返ると、スノーシューを履いた人が、遠くの方からこちらに近づいてくるのが見えた。

日帰りの雪山だったが、雪の量が想像以上に多く、雪景色がきれいで、ラッセルを伴う稜線歩きを楽しむことができました。久しぶりで一人で山に登ったのですが、本当に誰かを誘えば良かったと思う山でした。実は、梶原さんも1月12日に登られていて、ホームページの掲示板で推薦しています。

<行動記録>

ゴルフ場口 7:10 ~ 登山口 8:00 ~ 達磨ヶ峰 9:15  
~ フトウガ峰 11:15 ~ 段ヶ峰 13:10 ~ 千町峠  
14:00 ~ ゴルフ場口 17:00

## <Mチーム>

## 奥美濃・小津権現山

大崎義治

2003年2月1日(夜)~2月2日

L 杉山 僚 北山峰生 木下春雄 松本明恵 大崎義治 岡本尚子

小津権現山は奥美濃の山である。標高は1158mと金剛山並み、低山の部類であるが降雪地帯に位置するため冬期はかなり手ごたえのある山と聞いていた。大阪からは3時間強で行ける。名神大垣ICを降りて、国道を258号、21号、417号、303号とハシゴしてトンネルを2つ抜けると久瀬村。役場の手前を標識に従って小津方面に右折、しばらく道なりに進むと小津の集落に入る。丸屋根の体育館があり、ここに駐車、幕営させてもらう。

2月2日(晴れ)

取り付きは駐車場から50mほど入った左手の白山神社裏手にあるのだが、これがやや分かりにくい。神社の鳥居の左を抜けて細い道を上がってゆくこと約100m、左手に「権現山登山口」の小さな白い札が立っている。6時30分、積雪で道が隠されているので慎重にルートを見極め、目印のテープを探しながら登り始める。30分ほどで尾根に出、さらに尾根通しに登ってゆくとやがて林道終点に合流する。ここが夏道の駐車場所で登山口を示す看板が立っている。

雪は最初足首くらい、林道終点から上でふくらはぎまで埋まる。高屋山956mに10:05着、ここから上部はほぼ膝深のラッセルとなる。高屋山から少し平坦部があり、やや下ったあと前衛峰に向けて100mの登り。ここを過ぎると直ぐに30mほどのキレットが出てきて半分は滑りながら下ると、あと150mの登り返しである。この辺りのラッセルが最もきつく足腰に来る。おまけに傾斜が急なため足が雪を踏み抜いて元の位置にもどってしまい、胸まで雪にまみれてもがけどもなかなか前進できない。一人元気な

北山さんが最後の50mを踏破して12時15分ようやく小津権現山山頂に着いた。取り付きから何と5時間15分、夏で2時間ほどの山というから倍以上かかってしまったことになる。

小津権現山山頂から北東方向に花房山を見ると、なかなか雄大な山容で登攀意欲を掻き立てるものがあつた。しかし、今日は時間的に無理と判断。山頂東の稜線に降りて最初の大きな尾根を下ることにする。稜線は平坦で風があるせいか、雪は比較的締まっていてワカンがよく効いてくれる。しかし、1km強の距離に1時間を要して、ようやく尾根の分岐点に立つ。地図とコンパスでルートファインディングしながら、最初は雑木林を快調に下っていった。高度が下がり針葉樹の樹林帯に入るころから、雪温が上昇して雪が足周りに付着して歩きにくくなった。さらに麓近くでは雪による倒木で登山道が寸断され、部分的に数行軍となり難儀したが、16時には無事小津集落に下山した。

今回断念した花房山を捉えるには、ラッセル力の揃ったメンバー構成でスピードが求められそうだ。あるいは、小津権現山から花房山までは山スキーが効果的かもしれない。スキーに自信のある方はチャレンジされてはいかがでしょう。

<行動記録>

小津集落 6:10 ~ 登山口 6:30 ~ 高屋山 10:05 ~ 小津権現山 12:20 ~ 尾根の分岐 13:30 ~ 小津集落 16:05

2002年12月29日(夜)～2003年1月2日

L 榊田誠寛 石井浩二 角田 浩 湯淺升夫

12月30日(快晴)

「はい、登山計画書を出してください」釜トンネルの入口で警察の方に声をかけられる。ふと「これから、それなりの所へ行くのだな」という思いが脳裏を横切る。しかし、この日の行程は、冬晴れの中穏やかに過ぎ、昼遅く、幕営地の徳沢に到着する。個人的には、この日が生涯初めての上高地入山となる。穂高連峰を肉眼で望むのも、恐らく初めて。河童橋周辺の閑寂とした中、夏は繁華街さながらの雑踏になると教えられるも、あまりの落差に戸惑いを覚える。

12月31日(快晴)

この日、前日同様の快晴の中、長堀尾根を登る。白山、木曾駒ヶ岳と雪中の登りは経験しているものの、登り始めて早々に落伍しだす。さらには、スリップしてベタッとこけてしまう。見かねたのか、榊田リーダーよりアイゼン装着の勧告が下りる。実は、12月8日の担荷の際に転倒して右掌を骨折しており、未だ中指、薬指、小指を一纏めにして添木で固定しているような状態。それもあっての早々の「勧告」とは思うものの、自らの不甲斐なさに些か慥然となる。長堀尾根上部で登りが緩やかになる頃には、漸くパーティーの速度へ付いて行ける様になる。どうやら「雪中の急登」というのは自分にとってかなりの弱点らしい。今後の重要な課題。夜、寒さでよく眠れない。特に腰と足に冷たい物が当たっているのが辛く、それを避けて不自然な体勢で眠る。翌朝、確認したところ、それぞれの場所にポリタンクとテルモスを発見する。翌日以降は、それらを厳重に隔離して眠る。

1月1日(快晴)

常念岳へのアタック当日。軽く朝食を済ませ

た後、早々に出発準備にかかるが、ブーツの紐が針金のように凍ってしまって結べない。ビニール袋を掛けていたものの、紐はそれ以前に濡れてしまっていたらしい。あわてて掌で暖めて溶かす。以降は、インナーだけでもシェラフカバーの中に入れて眠ることとする。

真っ暗な中を出発。星が瞬く下、雪原を行くが、月面を歩いているような気分。蝶槍を過ぎる頃には、東方の山々の稜線が白々となりだし、空の様子もはっきりする。快晴。蝶槍を下りて次のピークへ少し登った辺りで、休止して日の出を望む。辺りが金色に染まる中、今更ながら、これが初日の出だということに気づく。ここまでドラスティックな年始も初めてだよなぁ...と感慨に浸る。明るくなったこともあって以降の行程も順調に進み、最後の樹林帯を抜け、常念岳への登りに入る。しかし、この頃になると、今までの元気が嘘のように消え去って、パーティーより落伍し出す。ルートにも浮石が現れ、東斜面は雪庇、西斜面はガレ場というような地形。榊田リーダーにエスコートして貰いながら進むも、今回の山行はリーダーが一人。他のメンバーが経験者だから良かったものの、でなければ困ったことになっていた状態。一行の支援と心遣いにより、どうにか常念岳の山頂を踏むも、感慨もそこそこに復路へ折り返す。これが、辛い日々行程となる。榊田リーダー以外、テルモスだけでポリタンクを置いてきてしまっていた為、快晴の陽射しの中、飲物不足に悩まされる。更には疲労も重なり、腹は減れど固形物が喉を通らない。頭の方も「ぼー...」としてしまって、全然働かない。とにかく東斜面に近寄らないよう気を付けながら、ひたすら進む。幕

営地に戻った頃には、既に出発して12時間後。テントに入って、ありとあらゆる物を飲みまくり、漸く人心地つく。

反省としては、何よりポリタンクを置いて出たしまったということ、そして、食べられる体力があるうちに食べなかったこと。休止の際も、飴をしゃぶっていただけだった。朝食も体調が悪くなければ夕食並に食べられる性質なので、パーティーの食事に足して、個人としてもっと食べておくべきだったように思う。

1月2日(小雪)

長堀尾根を下り、帰路に着く。2時起床、4時出発で、真っ暗な中を出発する。天候はこれまでの3日間と違い、雪がちらつき風も若干あり、おかげで所々トレースが消えてしまっている。しかしながら、予定通り11時過ぎには釜トンネルを抜ける。バスを待つ間、小さな喫茶店で飲んだコーヒーが、とても美味しかった。

今回の山行の感想を一言で言えば、「宿題を沢山出されたなあ」といったところ。色々な課題が洗い出されたように思う。ちょっと一朝一夕では消化できないくらいの量。思い返すに、とても得難い経験だったと思う。最後に、榊田そして、山行は御一緒できませんでしたが、吉田両リーダーの御指導、御尽力に感謝いたします。また、何かと気遣って下さった、角田、湯浅両メンバーにも、ありがとうございました。

(石井記)

12月30日(快晴)

前夜遅く平湯温泉の駐車場に着き幕営。快晴のため、明け方はしんと冷え込んだ。バスで中ノ湯まで行き、いよいよ冬合宿が始まる。夏山で幾度か通った釜トンも、冬歩くのは初めて。トンネル内部は改修が進み、以前の面影はない。雪の車道をしばらく歩くと、大正池に着く。半分凍結した湖面に純白の穂高連峰が倒影し、山岳写真にはまっている自分にとって垂涎の景色が広がる。今日こんな天気がいいと、上に登る頃には下り坂だなあー、と心配になるぐ

らいの好天の中を、徳沢までひたすら歩く。徳沢は霧困気が好きで、一度泊まってみたかった場所である。到着時には、既に色とりどりのテントが張られていた。

12月31日(快晴)

今日も天気がいい。朝焼けの前穂高岳に見送られ、長堀尾根の登りが始まる。ルートはしっかりとトレースがつけられていて、そのおかげで、針葉樹の美しい木立の並びを楽しみながら、快適に登ることができた。稜線間際までいったん登ったが、風を避けるため少し戻って樹林帯の最上部でテントを張る。天気図を書くと、冬型は緩んだままだが、列島周辺に低気圧が発生している。明日の天気気が掛かりである。

1月1日(快晴)

3時起床。あたりはまったくの無音。雪がしんと降っているか、と思いつつテントを出ると満天の星。無風快晴だ。暗闇の中、蝶ヶ岳の丘陵の間を通り過ぎ、蝶ヶ岳の天辺に立つ。夜明け前の東の空は明るさを増し、その反射で槍ヶ岳から穂高連峰のパノラマがほの白く浮かび上がっている。山はおそらく朝焼けに染まるに違いない。その姿を是非とも写真に撮りたい。しかし蝶ヶ岳から先は樹林帯続き、展望は望めそうにない。不運だ。ところが蝶ヶ岳から鞍部に下り、2592mピークに向け少し登った地点で穂高側の展望がぽっかり開けた。天の助けとばかりにカメラを出す、そこに榊田リーダーの「行くぞ」という非情の声。万事休すか。だが泣きそうな私の顔を見て、リーダーも慈悲の心を起こしてくれたか、ここでワカンをつけるとの指示。ワカンをつけ終えると、うまい具合に初日が顔を出し、朝日に染まる穂高連峰の姿を撮影できた。リーダーにただただ感謝。あとは常念岳を目指すのみである。ところが、岩稜帯となり急な登りになっても、なかなかピークとの距離は縮まらない。あえぎながら、ようやく山頂に立った時には、出発から6時間が経っていた。まさか常念岳の頂に立てるとは思っていなかつ

たので、感激は大きかった。しかし、試練は帰路に待っていた。好天のためかなりの汗をかいたせいで、登りでテルモスの湯を使い切り、水切れの状態となって体が重くなってきた。予備の水を持たなかったのは迂闊である。リーダーや湯浅君の水を分けてもらい、何とかしのぐことができたが、帰路は往路以上にきつかった。

1月2日(小雪)

2時に起きてテントを撤収し、ヘッドランプの明かりを頼りに、暗い樹林帯を下る。ところが、自分のヘッドランプは寒さに弱く、すぐに暗くなってしまふ。ここでも、みんなに助けて

### <リーダー所感、梶田誠寛>

メンバーの原稿を読んでいると、自分がはじめて冬山に行ったときのことが思い出される。今は偉そうにリーダーをしているが、その当時、みんなと同じようなことをし、同じように感じていたのが蘇ってくる。誰にとってもそうだと思うが、生まれてはじめての冬山の印象は、強烈である。それでも、これはほんの入口に過ぎない。まだまだ、楽しい?事はいっぱいある。

もらいながら、長い尾根道を無事下ることができた。今回の冬合宿は、連日の好天に恵まれたおかげで、思いがけず常念岳のピークに立てた。しかしそれよりも、リーダーや他のメンバーがいると支えてくれたことが、深く心にしみる山行だった。

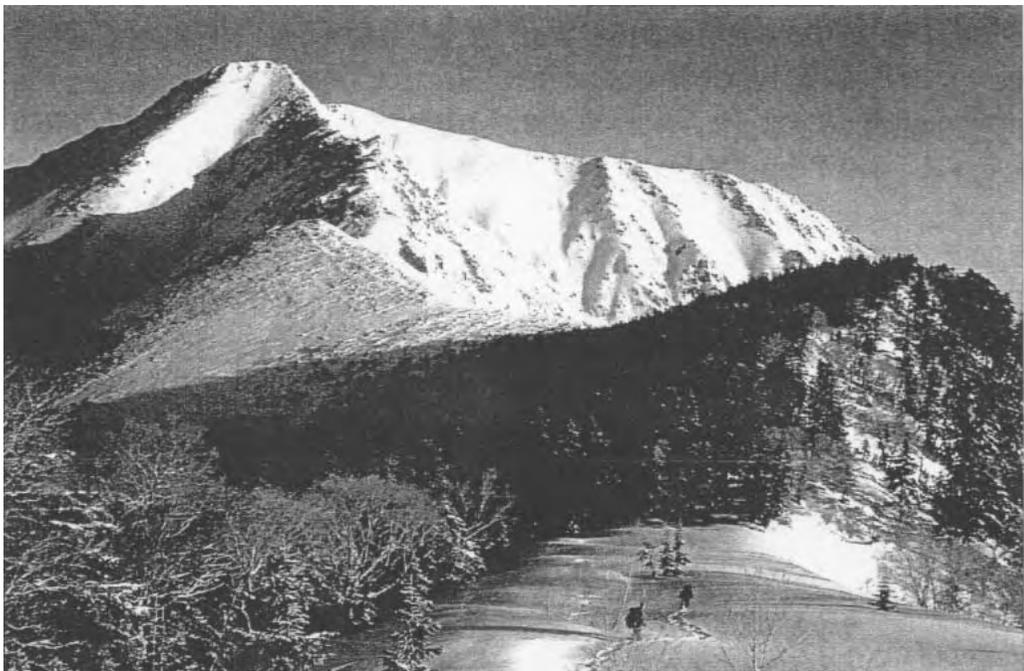
(角田記)

### <行動記録>

12/30 釜トンネル 9:00 ~ 徳沢 13:30  
12/31 徳沢 7:25 ~ 長堀尾根最上部 B.C.12:25  
1/1 B.C.4:30 ~ 常念岳 11:00 ~ B.C.16:00  
1/2 B.C.4:00 ~ 徳沢 6:40 ~ 釜トンネル 11:30

この冬山をスタートとしてもっともっと色々な経験を積み重ねていってほしい。その経験の積み重ねこそが、高みへの近道であることを知ってほしい。

私にとっても、今回は、Bのリーダーとして初めての冬の合宿だった。出発前は多少不安もあったが、メンバーに助けられて無事山行でき、私も貴重な体験をさせてもらった。



---

## <2002年度 納山祭報告>

11月30日(土)午後6時より、槇尾山において納山祭が行われました。

1. 開会の言葉
2. 会長挨拶
3. 乾杯
4. 各賞発表

会長賞 該当無し

会報賞 該当無し

最優秀山行賞 常念山脈縦走

2001年12月28日(夜)~2002年1月2日

CL 榊田 SL 杉山 有永 名越

### 五大山行

一、三ノ沢岳 2002年12月3日(夜)~12月6日

L 梶原 大喜多

二、西穂高岳 2002年2月9日(夜)~2月11日

L 翁長 坪佐 笠松

三、白馬岳主稜 2002年4月28日(夜)~5月2日

L 梶原 村田 大喜多

四、奥大日岳 2002年5月5日

L 筒井 笠松 木下 長井 松本 大崎 上田 牧野 坂口 岡本

五、剣岳集中合宿 2002年8月13日(夜)~8月18日

CL 有永 SL 杉山 SL 名越 坪佐 笠松 北山 木下 長井 村田

上田 牧野 翁長 中井 永井 山倉 長瀬

5. OB紹介
6. 新人紹介

### 参加者(敬称略)

#### <OBチーム>

紀伊筈本 村本 秋田 谷 大西 三原 宮平 山榊 森坂 板谷 山倉 森本 仙谷 野原 松田

#### <Mチーム>

翁長 西村(晶) 有永 戸松 筒井 北山 榊田 吉田 長井 名越 澤 松本 大崎 上田 坂口  
岡本

#### <Bチーム>

石井 角田

---

## <2003年度 総会報告>

12月4日(水)午後7時30分より、当会事務所において2003年度の総会が開催されました。以下の通り、報告決議されました。

参加者(敬称略)

岸本(久) 翁長 戸松 琴浦 榊田 北山 名越 木下 澤 松本 大崎 牧野 上田 島

議長 戸松高志

- |                   |                    |
|-------------------|--------------------|
| 1. 開会宣言           | 5. 新役員挨拶           |
| 2. 会長挨拶           | 6. 姉妹クラブ設立案(承認) 注1 |
| 3. 2002年度決算報告(承認) | 7. 2003年度予算案(承認)   |
| 4. 2003年度役員選出     | 8. 会則一部変更案(承認) 注2  |
| 会長 翁長和幸           | 9. 質疑応答 注3         |
| 副会長 戸松高志 琴浦登      | 10. 閉会宣言           |
| 理事 坪佐圭子 榊田誠寛      |                    |

注1) 姉妹クラブ設立案の要約

泉州山岳会 E.P.E クラブ(以下 E.P.E)は、泉州山岳会を母体とする姉妹クラブとして設立します。かつての岳友との終生にわたる親睦と友誼を図ることを願って、「泉州山岳会 E.P.E クラブ(略称 E.P.E)」の設立を考えました。OB 会員をメンバーとし、元会員をサブメンバーに、メンバーの家族、友人、知人をゲストメンバーとして構成します。OB 会員は自動的に E.P.E クラブのメンバーになり、泉州山岳会と同席する事になります。入会手続きは不要です。

E.P.E の運営費は、メインメンバーは泉州山岳会の OB 会費より年間 3000 円を還元充当します。サブメンバーは年会費 3000 円を徴収します。ゲストメンバーは年間 3000 円を上限として、参加 1 回につき参加費 500 円を徴収します。例会予告の郵送代、その他にこれを充当します。E.P.E クラブ規約等、詳しくは、E.P.E クラブ事務局、竹中、磯辺両氏まで。

注2) 会則の改定

下記項目を追加する。

### 第4章 会員

- 第7条 7. 6項の休会の理由が(出産、病気、転勤等)止む負えない事情である場合は、理事会に受理されれば、会費を免除される。この休会の期間は、2年を限度とする。

### 第9章 会計

- 第22条 2. 会員の家族(夫婦、親子、兄弟)が入会する場合には、会費を月額500円にする。

注3) OB 会員の山行届について

今まで OB 会員に付いては、山行届の提出は慣例的にあまり厳しく言っていませんでしたが、時代の流れと共に OB 会員も多様性をおびてきました。そこで、困難な山行や、ザイルを必要とする山行に付いては、「OB であっても山行届の提出を徹底してください」という話が会長よりありました。

## ＜2002 年度決算＞

### 1. 一般会計（自 2001 年 12 月 1 日 至 2002 年 11 月 30 日）

収入の部			支出の部		
科目	決算額	適用	科目	決算額	適用
前期繰越金	398,000		印刷費	31,629	会報、封筒角 2 作成
会費 OB	578,000	48 人（*1）	事務所維持費	783,010	家賃、振込料、電気代
M	942,000	38 人（*2）	装備費	292,091	ガレ、テント 3 張、ツェルト
B	52,000	5 人	研修費	8,130	労山やぐら賃料
小計	1,572,000		事業経費	119,237	納山祭
入会金	25,000	5 人	岳連費	15,120	岳連会費、振込料
事業収入	144,000	納山祭 36 人	新人募集費	161,810	山溪広告、応募者対応
雑収入	18,407	ルーム費・B 残金	通信費	115,475	会報発送、電話料
受取利息	1,074		事務費	20,959	
			書籍購入費	8,900	岳人定期購読
			雑出費	12,678	振込料
			予備費	13,997	事務所整備
			基金繰入（*3）	314,400	遭難対策、新体制準備
			時期繰越金	261,045	
合計	2,158,481		合計	2,158,481	

\*1：複数年度納入者の 7 人を含む。納入者の実数は 41 人。

\*2：複数年度納入者の 4 人を含む。納入者の実数は 34 人。

\*3：基金繰越金は会費収入の 10%とする。

### 2. 特別会計（自 2001 年 12 月 1 日 至 2002 年 11 月 30 日）

#### 1) 遭難対策基金（支出なし）

科目	決算額	適要
前期繰越金	960,382	
60 周年記念事業残金	67,790	
一般会計より繰入金	157,200	
合計	1,185,372	次期繰越金

#### 2) 海外登山援助基金（支出なし）

科目	決算額	適要
前期繰越金	1,702,307	
合計	1,702,307	次期繰越金

#### 3) 新体制準備基金（支出なし）

科目	決算額	適要
前期繰越金	916,192	
JAM 協議会謝礼	50,000	
一般会計より繰入金	157,200	
合計	1,123,392	次期繰越金

2001 年度決算に記載の 60 周年記念事業の貸付金（仮払い）は 2002 年 12 月 3 日に精算済み。

### 3. 財産明細

種類	金額	内訳	金額
郵便定期 (*1)	1,500,000	2002 年度繰越金	261,045
郵便貯金 (*1)	336,035	遭難対策基金	1,185,372
郵便貯金 (*2)	2,436,081	海外登山援助基金	1,702,307
三井住友銀行堺支店普通預金 (*3)	0	新体制準備基金	1,123,392
事務所賃借保証金 (*4)	500,000	事務所賃借保証金	500,000
合計	4,772,116	合計	4,772,116

\*1：口座記号 14130 番号 74088061 名義 泉州山岳会（保管者：戸松高志）

\*2：口座記号 14510 番号 11148591 名義 泉州山岳会（保管者：戸松高志）

\*3：口座番号 2085822 名義 泉州山岳会（保管者：戸松高志）

\*4：1971 年 7 月 14 日付け貸家賃借契約証 借主 泉州山岳会会長百田百人（保管者：戸松高志）

### <2003 年度予算>

収入の部			支出の部		
科目	予算額	適要	科目	予算額	適要
前期繰越金	261045		印刷費	55,000	会報、封筒作成
会費 OB	528,000	12000 × 44 人	事務所維持費	788,000	家賃、振込料、電気代
M	912,000	24000 × 38 人	装備費	100,000	ピーコン、コッヘル
B	80000	16000 × 5 人	研修費	20,000	遭難訓練、その他
小計	1,520,000		事業経費	140,000	納山祭
入会金	25,000	5000 × 5 人	岳連費	16,000	岳連会費、振込料
事業収入	140,000	納山祭	新人募集費	165,000	山溪広告、応募者対応
雑収入	10,000	合宿残金等	通信費	115,000	会報発送、電話料
受取利息	1,500		事務費	110,000	コピー機等
			書籍購入費	30,000	岳人定期購読、その他
			EPE 補助費	147,000	3000 × 49 人
			雑出費	19,545	
			予備費	100,000	
			遭難対策基金	152,000	
合計	1,957,545		合計	1,957,545	

## <山行記録>

### <Mチーム>

- No.5859 谷川岳・東尾根(途中まで)  
12月13日(夜)~12月15日  
L北山 有永 坪佐 名越
- No.5860 冬山合宿・鹿島槍ヶ岳  
12月30日(夜)~1月2日  
CL坪佐 SL北山 名越 木下 大崎 島  
上田
- No.5861 湖北・横山岳  
12月14日(夜)~12月15日  
L木下 牧野 松本 大崎
- No.5862 大峰・天知山~滝山  
12月15日  
上田
- No.5864 屯鶴峰~大和葛城山  
12月7日(夜)~12月8日  
L木下 大崎 牧野 坂口 上田
- No.5866 二上山~紀見峠  
12月22日  
L坪佐 北山 名越 岡本 坂口
- No.5867 播但・段ヶ峰  
1月4日(夜)~1月5日  
杉山
- No.5868 八ヶ岳  
1月11日(夜)~1月13日  
L北山 名越
- No.5870 武奈ヶ岳  
1月11日(夜)~1月12日  
L杉山 松本 大崎
- No.5871 八ヶ岳  
1月10日(夜)~1月13日  
L有永 会員外3名
- No.5872 氷ノ山  
1月11日(夜)~1月13日  
L翁長 西村(晶) 坪佐 榊田
- No.5874 堂満ルンゼ  
1月18日(夜)~1月19日  
L杉山 木下 大崎
- No.5875 八ヶ岳  
1月17日(夜)~1月19日  
L北山 名越 牧野 坂口
- No.5876 伊吹山(雪上訓練)  
1月25日(夜)~1月26日  
L坪佐 杉山 島 岡本 牧野
- No.5878 奥美濃・小津権現山  
2月1日(夜)~2月2日  
L杉山 北山 木下 松本 大崎 岡本
- No.5879 台高・明神平~国見山~雲ヶ瀬山  
2月1日~2月2日  
L村田 長井 上田
- No.5881 山上ヶ岳  
2月8日(夜)~2月9日  
L上田 村田 木下
- No.5882 鈴鹿・綿向山  
2月8日(夜)~2月9日  
L宮尾 坪佐
- No.5883 台高・明神平~桧塚(途中まで)  
2月8日(夜)~2月9日  
L大崎 松本 岡本(尚)
- No.5884 南アルプス・荒川3ルンゼ(アイス)  
2月9日(夜)~2月11日  
L北山 杉山
- No.5885 大峰・ワサビ谷(アイス)  
2月15日(夜)~2月16日  
L北山 杉山 木下 大崎 坂口
- No.5886 大峰・上多古川(途中まで)  
2月14日(夜)~2月15日  
L北山 杉山
- No.5887 スキーカーニバル(らいちょうバレー)  
2月21日(夜)~2月23日  
L名越 仙谷 大空 西村(晶) 琴浦 坪佐  
北山 榊田 吉田 島 坂口 岡本 石井

会員外 6 名

<Bチーム>

No.5858 屯鶴峰～大和葛城山

12月7日(夜)～12月8日

L 榊田 吉田 石井 角田 湯淺 池間

No.5863 槇尾山～岩湧山

12月21日(夜)～12月22日

L 榊田 湯淺 向井

No.5865 冬山合宿・常念岳

12月29日(夜)～1月2日

L 榊田 石井 角田 湯淺

No.5873 比良・堂満ルンゼ

1月18日(夜)～1月19日

L 榊田 角田

No.5877 伊吹山(雪上訓練)

1月31日(夜)～2月2日

L 榊田 角田 石井

No.5880 大峰・ワサビ谷(アイス)

2月15日(夜)～2月16日

L 榊田 湯淺 石井 谷村

<編集後記>

価値観の多様化とともに自己実現をするのが難しい時代になりましたが、登山というのは自己実現を可能にする数少ないフィールドのように思います。山でなくてもいいのですが、真剣に、楽しいこと、充実することを追求して、自分自身の適性が最大限に発揮できたと感じたとき、人は「生きている」という実感を感じるものではないでしょうか。

人は喜びを追求し、自己実現をして幸福な状態にあるとき、人の幸せを心から願うことができるようになります。そして、周りの人と励まし合いの人間関係、つまり、ポジティブフィードバックの人間関係を構築することができ、幸せの輪が広がっていきます。しかし、自己実現をするためには知恵と勇気が必要であり、自分自身の喜びを追求することは、本当は簡単なことではないようです。これは、心理学者の岩月謙司さんが折に触れて言われていることです。

この冬山号では、無事成功に終わった冬山合宿を始めとして、アイスクライミング、雪稜、近郊の雪山など、トレーニングの積み重ねの上に、主体的に活動を行った成果を報告することができました。主体的に取り組むことは喜びを追求するための一歩だと思いますが、さらなる向上心をもって自己実現を目指し、世界を広げていきたいものです。

さて、今年も新しい4人の仲間を正会員に迎えることができました。すでに活発に活動されていますが、よろしくお願ひいたします。

石井浩二 No.1304, 角田 浩 No.1305

湯淺升夫 No.1306, 逸見健三 No.1307

今年はBチームの運営方法が変わります。CLは引き続き榊田氏にお願いしますが、コーチ陣はMチームのメンバー全員が分担します。Bチームの運営にもご協力をお願いいたします。

最後になりましたが、OB 会員の丸山明雄氏が2月8日に急逝されました。心からご冥福をお祈りいたします。

(杉山記)

泉州山岳会会報 「葛城」

第64年1号(通巻330号)

2003年冬山号

編集人 杉山 僚

発行所 泉州山岳会

〒590-0027

堺市榎元町2-1-9小野木ビル3F

TEL&FAX 0722-21-4454

<郵便口座>

記号14130番号74088061

名義 泉州山岳会